

資源環境経済学特別演習 I 議事録
2016年度 第4回

報告題名 (title) : 中国・内モンゴル畜産地域における生態移民政策に関する研究	
報告者 (name) ソリゴガ	日時 7月7日 午後3時～
所属分野 (labo) フィールド社会技術学	場所 第3講義室
座長 吉田 朋記	議事録 木暮 悠太
出席者 木谷、井元、小山田、米澤、冬木、伊藤、石井、水木、西田、Debby、Indri、佐藤、石塚、尾崎、ソリゴガ、吉田、趙、李、木暮、辻、オルガマル、ゲゲンタナ	
報告要旨 (Abstract) <p>中国には新疆、チベット、青海省、甘粛及び内モンゴル自治区といった五大牧畜地域が存在し、国土面積の四割強を占め、そこでは主に少数民族が牧畜業を営んでいる。その一つ、内モンゴル自治区の通遼市ハンウラ保護区は通遼市における代表的な草原地域であり、草原の豊かな自然の景色とそこに暮らす遊牧民の伝統的な遊牧文化の魅力ゆえに、国内有数の景勝地でもある。しかし、近年人口増加による乱開墾や過剰放牧、地球温暖化や干ばつにより草原の生態環境が破壊され砂漠化し、さらに砂嵐が頻繁に起こるようになり、また、当地域の貴重な植物と野生動物が絶滅の危機に直面している。こうした状況の中で政府は破壊された草原を取り戻し、絶滅の危機に直面している貴重な植物と野生動物を保護し、牧畜民達の生活水準を向上させるため、牧畜民達を移動させ、彼らの営んで来た伝統的な牧畜業を止めさせる、「生態移民」政策を実施した。</p> <p>本報告の目的は内モンゴル通遼市ハンウラ地域における移民らの「生態移民」政策による生活現状を把握し、今後その政策によって産み出された「生態移民」の生活状況がどのように変化するかを明らかにすることである。</p> <p>具体的には、政府の「生態移民」達に対する援助及びその効果、「生態移民」が直面している経済、環境、文化や習慣等がどのように変化するかを明らかにし、また当地域の「生態移民」生活の安定や変化に向けた経済的及び社会的政策条件を考察する。</p>	

質疑・応答(Q & A)

①木暮修士 1 年生

Q1:調査対象地域には335戸あるとされているがそのうち何割くらいが放牧を営んでいる？1戸当たりの人数が少ないのでは？

A1:高齢者世帯も含めて、ほとんどの世帯が営んでいる。

②石井准教授

Q1:この地域の放牧状況や人口の変化やそれに伴う環境悪化のデータ等は研究に組み込まれているのか？

A1:家畜の増加数に関してははっきりとは分かっていない。政府が詳しいデータを公表していない。

Q2:96 ムで1頭の羊。96 ムはどれくらいの広さ？政府が定めた頭数制限の規準よりも現状の方が放牧が多いことは調査から見えてきた？

A2:1 ムが0.63a。96 ムで60a くらい。現時点では家畜頭数の制限数よりも多い。政府の制限数を守ると暮らしていけない。

Q3:実際頭数がどう変化したかは調査できない？聞き取り調査では聞けない？

Q4:正確にはわからないが増えている傾向が見かけられる。また、頭数制限に国民に守らせると国民が貧困になり補助金を出さないといけないので黙認している。

③米澤准教授

Q1:一人っ子政策は内モンゴル自治区には適用されない？

A1:少数民族は適用されない。

Q2:定住、生活のパターンが変わってからどれくらいたった人たちに聞いた？

A2:2003年に移動した人たち。

Q3:完全定住化家族家計構造の分析ついて定住した前後で教育費はどう変わった？

A3:移転する前は教育費を自分で払うが、移転後は政府から補助が高校生まで出る。

Q4:満足度の聞き取りについて、様々な観点から聞き取りしている。子供の教育に対する満足度が項目に入っていないが、考慮しなくていいのか？

A4:気にはなっている。移転前はモンゴル語教育だったが、移動してから多くが漢語の教育も受け始めている。